

# 短歌

七月号

昭和四十年七月号  
日本郵政特許第...  
昭和四十年七月号

第3の胃腸薬!  
〈高単位酵素消化剤〉

# パンラーゼ



東京田辺

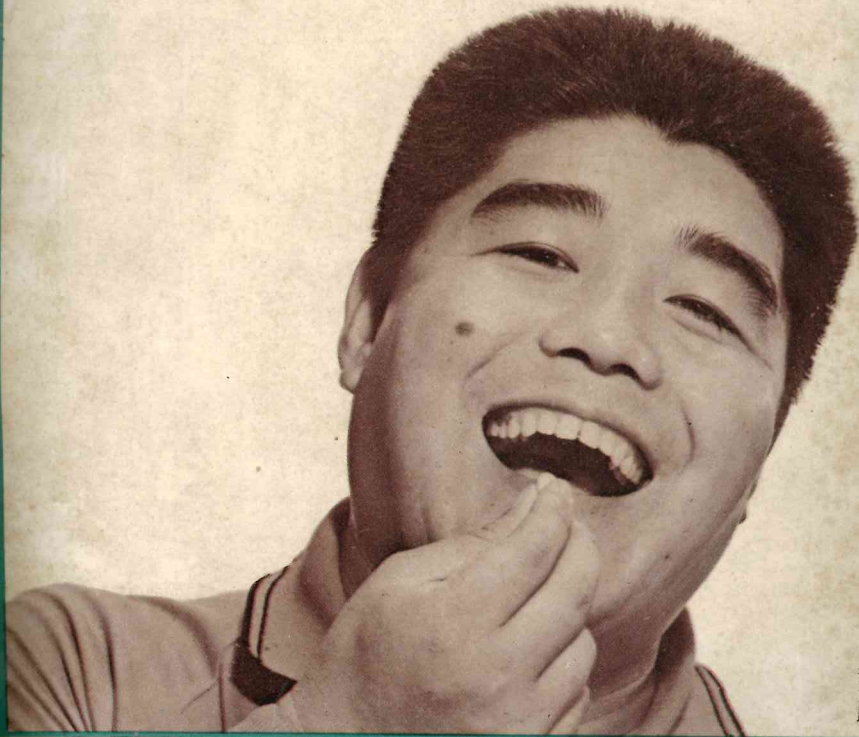
〈消化〉には

パンラーゼがある!

胃腸がいつも重苦しい・胃弱  
下痢、便秘する・ガスがたま  
る・食欲不振・体力がない方

胃から腸まで消化し続ける強力酵素群に  
肝臓薬やガス除去剤も加えた、新型の特  
殊二層錠です。胃腸をスッキリと整えて  
食物を高度に栄養化します。

30錠400円 100錠1,200円



大映・丸井太郎

¥150

IBM 5919

の三歌集C金石淳彦・宮村二・近藤芳美・岡井隆・生方たつる・佐佐木信綱

金婚は死後めぐり来む朴の花絶唱のごと蕊そそりたち

四六判 瀧波善雅装釘 上製函入美本 定価七〇〇円送料一〇〇円

晩春	山本雄一	90
飢渴	須永義夫	92
ふるさと	人里弘	94
遠き湖	高原博	96
オーケアノスの舟唄	稲垣留女	98
微粒塵	高橋徳衛	100
歌集「本草と共に」を読む	大岡博	102

12首

短歌批評の可能性・論の論Ⅳ 菱川善夫 104

…「文学史とは何か」の問題にふれつつ再び玉城徹を批判する…

四つの秤 島田修二・中山周三 117

——作品検討—— 新田隆義・片桐顕智 117

歌誌月評 大野誠夫 124

松坂弘

蒼穹・薔薇・実生・母船・無派  
童牛・浅紅・日本海・短歌個性

書評

大伴道子「鈴鏡」 田中克巳

西原重敬「雪炎」 久保喬

安田章生「日本詩歌の正統」 滝崎安之助

「近代短歌講義」 久保忠夫

足達己巳子「朝の海」 佐伯仁三郎

読者短歌・七月 坪野哲久選 160

長沢美津

●さいろとさいりっじ(歌誌抄) 編集部編 138

カット 竹花忍





鈴鏡 雪炎  
日本詩歌の正  
統 近代短歌  
講義 朝の海

# 大伴道子歌集「鈴鏡」

田中克巳

(詩人)

前川佐美雄門下の才媛で『花影』の主筆者の一人である作者とおつきあひは、上京以来で十年近くなる。『花影』創刊以前にも歌会には多くの文人詩人を招かれるのが例だが、前著『道』の出版祝賀会に出席した蔵原伸二郎氏や山之口漢氏などの姿なども、作者に關連してなつかしく惜しく思い出される。

そんなわけでこの歌集を見るととすぐ『花影』に読後感を記したが、その際にいひのこしたことを書かしてもらへればと思ふ。

この歌集は四部から成つてゐて、第一部と

第二部、第四部は紀行の

歌で、風景が美しくロマ  
ンチックに描き出されて

ゐて、なかなか巧みであ  
ることはもう書いたが、

第三部だけはふれなかつ

た。これは昭和三十九年四月二十六日の御夫君の急逝とその以後の感想をあつめてゐるからである。哀悼の歌の人をよく打つことは、常識であるが、ほめられてうれしくないのは、わたくし自身の経験でも知つてゐる。戦争中に子供を亡くし、戦後その時の感想を見せたことがあるからである。

しかしここをぬかしては書くことがなくなるので、いやいやよましてもらふと、果して大変な感動を受けた。

いまわれはせむすべ知らに病む人のくる

しみせまる呼吸数へつつ

ある限りのすべは尽くせど及ばざり苦し  
みたまふおんひとりにて

といふのは、これ以上の写し方はないであらう。後の方の「おんひとりにて」といふ句が大財閥の当主として多くの部下をもつてゐた人だけに、他の場合とちがつて「死」の實際を恰好に表はしてゐるではないか。

握りつつけしおん掌にだいに冷えまさり  
忽然と来たるかたき表情

といふのも巧み以上のものである。

この春の花の美しさ思ひたりふたたびは  
見ざる爛漫なりき

この「爛漫」は錯覚か。山之口氏や蔵原氏の御遺族にも承りたいところである。「荒野と、かわいた地とは楽しみ、さばくは喜びて花咲き、さふらんのように、さかんに花咲

き、かつ喜び楽しみ、かつ歌う」といふのはイザヤに書きしるされた西アジアの乾燥地帯のことであるが、われわれはたえず美しい花の咲く地帯に住み、爛漫の春には慢性となつてゐるはずである。のこされた者だけがその前の風景をことさらに美しく感じるのではある。

竜神は天に昇るとこの年のはじめに言へる言葉もふかく

前兆があつたのか、作者はこんなことばを悲しくも記憶してゐるのである。

おんひとりの旅はさびしく在すらむ生き  
てはゆかれぬ西方の国

極楽浄土を西方とこの家族は考へてゐる。宗教を異にするわたしは目をあげて天上に向ふのであるが、気持は同じであらう。ただしひとり旅といふのはどうであらうか。多くの同行者がゐると思ふのだが、現世は日夜つれだち語りあひながら、結局はひとり旅と思ふわたしのかなしみに作者は同感されないかはり、あの世への旅を再生と考へ、多くの友と再会するまでの「ひとり旅」をさうわたしは悲しまないのだが。

思ふことのすべてをわれに告げおきて身をいたはれと言ひしは昨日

ここでも前兆が歌はれてゐる。急逝を予感したまふたか、えらい人である。

ことしこそ花や咲かむと待ちがてにめた  
まひし藤も咲きてうつろふ

藤の花を見ないで逝かれたのである。「夢見る者は偽りの夢を語り、むなし慰めを与える(セカリヤ書)わたしも多くの花を培ひその咲くのを見る夢がまだすて切れない。ただ年年その夢のほかなさに気づくことが回数を増し濃度を増すのだが。

蛙なく背戸の水田の片ほとり松風ききて  
君ねむりたまへ

故人の郷里は伊吹山の見えるところといふから、わたしが一年すごした彦根の近くであらう。田圃の中の小・中学校はみな出身者の寄附で立派な造りであり、白壁の家も関東平家の田家とは違ふ。ただし冬の伊吹下しの寒冷にはわたしはあたまたまれず満一年で「寒冷地帯」といふ詩一篇を作つて逃げだした。春夏秋は美しい国である。

抱へもつ壺は小さしうすがすみ伊吹を空  
にあぶくおん墓

一度はお参りしたいものであるがここにあらのは石碑だけで、み魂はとどまつてゐまい。もの消ゆるふしぎを今も思ひをり所詮は

消ゆるわが身と思ふ

胸を打ついくつの鐘は鳴りひびく日は目  
をどちてまきほかはなし

「百千の草葉もみぢも、野の勁き琴は鳴り出づ」と歌つたのは詩人伊東静雄である。作者の心中の鐘も「百千」であらう。しかし一様に悲しみをたたへてゐるとすれば、この奏の音は伊東の「勁い琴」のひびきはもたないであらう。お気の毒なことである。

手をとりて心やすかれと無言にて言ひけ  
るおん目のうち濡れてゐし

かう歌へる妻はあまりないであらう。わたしなど妻の悲しみに手を貸さず、ましてや泣いてやつたこともない。傑作であると同時にこれが歌へればと読者をうらやます美しい歌である。

茂吉の「死にたまふ母」以来、悼歌はみなよみ、みな感心したが、大伴さんのは一層実感があつて感動にたへられなかつた。作者の人格か、あるひはこの数年間のおつきあひのひいきか。わたしには断定できないながら、人みな葬りには涙ながし、しかもあまりに泣きすぎたまふな。この人のやうに歌へれば歌で、うたへねば祈りたまへと慰めにいふ。

(角川書店刊/九五〇円)



はじめて公開された  
表千家の  
すべて

# 表千家

## 干支戸編

絶賛発売

体裁 A4判箱入美装本/写真多数  
定価 三、九〇〇円 (発刊記念予約)  
特価 三、七〇〇円 (40年9月末日迄)

角川書店

### 後記

現代短歌における評価の基準を確立せよという声をよく耳にします。普遍的な基準が建てられ広く受け入れられるなら、それは現代短歌の質的向上に、エネルギーのむだな損耗を防ぐことができるのではないかとその実現に期待します。たとえば、他ジャンル論の論理を借りた短歌不在の逸脱や疾走などはまったくむだな損耗です。  
笠原伸夫氏には、その現代短歌における批評活動の実状を通して、批評の意義および

### 募集規定

- \*住所氏名を明記してください。  
\*かならず短歌と朱書してください。
- 1 読者短歌 (一五三頁、応募規定参照)  
用紙はハガキ。縦書きとし一人五首以内にねがいます。
- 2 読者短評  
四〇〇字内外、原稿用紙にお書きねがいます。掲載分には掲載誌を一部お送りします。
- 3 サイロ  
各地歌壇のニュース・写真などお送りください。

### 広告案内

- (1) 表紙二、三、四は書籍雑誌以外のものをお願いしております。有楽通信社に一任しております。
- (2) 目次、袖は書籍雑誌広告をお願いしております。有楽通信社に一任しております。  
▽有楽通信社 東京都千代田区四番町一〇  
(電話) (芸文) 三三四一・九 雑誌部 南部貞夫宛  
▽電話 東京都中央区銀座西七ノ一  
(電話) (芸文) 八一一一 (代) 出版連絡局奥田春夫宛  
宛へ連絡次第、参上またはご返事申し上げます。  
本文記事中は小社宣伝部で取り扱っております。
- (3)

### 定価

一冊	一四〇円	千12円
六か月	八四〇円	千不要
一か年	一六〇〇円	千不要

特価共

### お願い

- ご注文は前金に願います。前金が尽きた際は雑誌の封皮に「前金切」の三字を朱書しますから至急ご送金下さい。
- ご送金は振替が最も便利です。
- 郵券代用は必ず一割増に願います。
- 外国よりのご注文は郵税を申し受けます。特別号にて前金不足を生じる時は不足金を頂きます。あらかじめご承知下さい。

### 短歌 七月号

特価 百五十円

昭和四十年六月三十日印刷  
昭和四十年七月一日発行

編集兼発行人 角川 源 義  
印刷所 中内 佐 光  
印刷所 曙印刷株式会社  
東京千代田区富士見町二丁目七  
角川書店  
振替 東京 九五二〇八番  
電話 東京 (265) 代表七二二番